国際GOCHISO市場 ～三年目の国際文化交流学科の挑戦～

外国語学部国際文化交流学科　3年　内村 藍子

国際文化交流学科は、今年で開設されて三年目です。ようやく三学年がそろい、人数や体制的にも基盤が固まってきたところでした。そんな年の初夏、今年もまた学科祭の企画の話がやってきました。これまで国際文化交流学科が行ってきた学科祭は学科生や教員を対象者とし、内部の親睦を図ることがその主な目的でしたが、今年は外に向かって何か発信できるものにしようと、学科の成長と共に学科祭も新たなステップへと踏み出すことになりました。

こうして実施された学科祭要綱は次の通りです。

テーマ　国際GOCHISO市場
―世界の食文化を体験しよう―

内容　●多国籍料理ブース　（韓国・ドイツ・インド・ベトナム・日本）
・学科生が各ブースを構成する。
・その国の食文化を調べ、各国の言語でレシピを作成すると共に、実際に調理し来場者にふるまう。

●餅つき体験
・担当の学科生が前もってそのノウハウを学び、参加者へ指導する。

●こがようこのおはなしおやつ
・語り手・絵本コーディネーターである、こがようこさんによる日本民話の語り。

参加者　学科生、教員、その他学生、地域の方々等

日時　十一月二十九日（土）

ゼロからの企画

国際文化交流学科祭には慣例がありません。実行委員として、何もないところからのスタートにはやりがいがあり、自由が与えられる反面、想像のつかなさからとても不安定でもありました。私たちはとにかくまず、話し合いを重ね、学科祭のイメージを固めていくことに力を注ぎました。そこでまず上がったのは、学科生にとって学年を超えてのつながりや学科の授業に対しての新たな視点を得る機会となってほしい、外部の人も気軽に来て何か持ち帰ってもらえるような場にしたいという思いでした。このような思いからスタートして、今年度の学科祭を生徒の手で創り上げる参加型のイベントにすることに決めました。実際は、この他にも会場決定

や宣伝方法、タイトルに至るまで決めなくてはならないことは山ほどあり、その際に皆が同じイメージを持ち、方向性をそろえることの重要性を常々感じていました。しかしながら、私の頭の中ではイメージが確立していても、それを皆に具体的なイメージビジョンを共有してもらうことはなかなか難しく、最後まで頭を悩ました点でもありました。

身をもっての異文化体験

多国籍料理のブーススタッフは夏休み前から、授業やチラシ配布を通して募りました。韓国やドイツのチームは第二言語の授業という枠を生かしてチームを編成し、その他のブースは参加希望者を混ぜてのミーティングで国を決め、チームを編成していきました。

各ブースにはレシピ作成と調理を委任し、料理の試作や材料の調達などそれぞれに取り組んでくれました。例えば、韓国チームでは韓国人の交換留学生と一緒にメニューの試作を行い、本場のレシピ通りに作るか、それとも日本人が食べやすい味に調節するかを考え、ベトナムチームではフォーの乾麺をタイのものとで食べ比べを行いました。

このような準備段階を通して、チーム内のコミュニケーションが自然ととれ親しくなったのだと思います。そしてまた、普段の学科の授業とはまた違ったアプローチで異文化に触れ、文化比較を行うことができ、学科祭の第一段階が踏むに至りました。

料理ができない?!当日のアクシデント

学科祭当日となり、準備もなんとか間に合って開場となり、ホッとしたのもつかの間、停電が起こってしまいました。原因はホットプレートの使用過度でした。チヂミ、芋もち、焼きフォー、ソーセージどれもホットプレートを使っての調理を想定していたのにも関わらず、体育館の電源を考慮していなかったのです。幸いにも体育館の照明等は別電源で助かりましたが、このままでは肝心の料理が出せません。急遽、家の近い人にフライパンの調達を頼み、コンロとフライパンで代用することで切り抜けられました。冷や汗ものの出来事でしたが、スタッフ皆が柔軟に応じてくれたことが、それ以後の会を取り仕切る上でも、とても心強く感じました。

学科祭を終えて

学科祭準備段階から当日に至るまで、とても慌ただしいものでした。実行委員が少なく、圧倒的な人手不足がその要因ですが、委員長として成すべきことはもっとあったように思います。しかしながら、他の実行委員やスタッフ、先生、またその枠を超えて、本当に多くの人の協力があり、来場者二百人という成功を治めることができました。私個人としても、皆をまとめる立場を経験したことから、多くのことを学ぶ機会を得られました。

国際文化交流学科は、歴史は浅いですが、その分有り余る余白と好きに描ける自由さがあります。この環境とそれをサポートしてくれる方々の存在に感謝しつつ、来年度にはまたどんな学科祭が出来上がってくるのか次の代を楽しみにしています。

学科祭実行委員。初めは、全くといっていいほど実感が無かった。開催日は、二〇〇八年十一月二十九日。私たち実行委員は、昨年の反省を生かし、夏休み前に始動した。どのような内容にするかを決めた程度で夏休みが明けた。そこからは、一気に自分の生活が学科祭のことで染まっていった。週一での話し合いや学校、学校外の方々との話し合い、材料集めなど、早く取りかかったはずなのに時間が惜しかった。

私の実行委員としての仕事は、会計と料理ブースの全体の責任者。会計は、しょっぱなから手こずってしまった。経費が手元に届くのを待たず、また、いつ届くのかを確認せずに必要物を購入しに行ってしまったため、購入者の負担が増えてしまった上に、自分の仕事も増やす結果になってしまった。これは、私が責任持って領収書の処理をし、購入者に返金することができたが、次回会計の仕事をするような機会があれば、予算を貰った上で、それを分配するというかたちをとろうと強く心に誓った。

料理ブースの責任者としても学べたことは沢山あった。料理ブースには、各ブースの責任者が五人いるわけだが、その人たちからの質問はもちろんのこと、それ以外の、ブースに関わっている人たちからも質問の嵐で、体がいくつあっても足りないくらい動き回っていた。時間の圧力と誰に何を指示したらいいのか頭が回らなくなろとしていた矢先、3年生の友人が、やるべきことといまの状況を口に出して指示してくれた。私は、彼女のおかげですごく救われた。やはり、大人数をまとめるのは、一人では不可能だと感じた。全員は無理だとしても、三年生だけ、または、せめて各ブースの責任者だけでも当日の全ての段取りを知り、材料把握をしておくべきだと感じた。その上で、全体の責任者を1人つける。このように、ほぼ全員がやることを知っている、というかたちがベストなのだ、と当たり前のことをつくづく学ばされた一日だった。

学科祭の実行委員を務めたことで、多くの人と知り合い、仲良くでき、大学生活というものが充実したように思えた。また、人文学会をはじめ、学生課や六角橋商店街の方々、生協の方々、学科祭責任者の先生、そして、学科祭に関わり、協力してくれた友人や後輩たち、本当にたくさんの人に支えられて成り立っていて、そのおかげで、自分もあるのだなと思い感謝の気持ちでいっぱいになった。

外国語学部国際文化交流学科　3年　岡崎 春佳